

松 山 大 学 論 集
第 22 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 1 0 年 12 月 発 行

薬学史の時代区分に関する研究(1)
——「信心」と「信仰」による別府温泉利用の
古代医療誌を通じた史的考究——

牧

純

薬学史の時代区分に関する研究(1)

——「信心」と「信仰」による別府温泉利用の
古代医療誌を通じた史的考究——

牧			純 ^{*)}
増	野		仁 ^{**)}
郡	司	良	夫 ^{***)}
坂	上		宏 ^{****)}
桑	田	正	広 ^{*****)}
西	岡	麗	奈 ^{*)}
関	谷	洋	志 ^{*)}
玉	井	栄	治 ^{*)}

要 約

薬学史の時代区分を検討する1例として、別府温泉利用の医療史と医療誌に注目する。全国他の地域にも例があるように、別府温泉も既に江戸時代、医療目的で使われていた。それは、本格的な「化学」の導入前のことで「経験」的ではあるが、現在の我々から見ても合理的であった。今日的価値のある医療利用が何世紀まで遡れるかの観点から時系列的検討が始まった。すなわち古代における発展段階としての「信心」、「信仰」と長年の「経験」等の蓄積に基づい

*) 松山大学薬学部感染症学，松山市文京町2-4，〒790-8578

***) 松山大学経済学部中国文学，松山市文京町2-4，〒790-8578

****) 松山大学人文学部図書館学，松山市文京町2-4，〒790-8578

*****) 明海大学歯学部薬理学，坂戸市けやき台1-1，〒350-0283

*****) 八戸大学人間健康学部栄養学，八戸市美保野13-98，〒031-8566

た別府温泉利用の医療誌の蒐集に努め、今回はAD8-12世紀関係の史料を中心に以下の如く考究した。

記録に乏しい古代の別府温泉ではあるが、まず古文書に記載されている自然誌を中心に状況と背景をみる。当時の大災害は、予想されるように、「神の怒り」などといった認識でとらえられていた。地表に噴出している熱湯の温泉は「地獄」の現れとみられていた。しかし、自噴の熱湯に畏敬の念を抱きつつも、ある種のご利益を期待していたような面も窺える。それは、傷ついた動物たちが未知の温泉噴出の地にやって来ては癒やす様子が目撃されたことがひとつの契機となったと考えられる。日常生活のなかで次第に温泉の健康的な利用が地域住民の知恵とも、「信心」ないしは「信仰」のもととなっていったと推測される。平安時代の別府で、これが形ある「信仰」となるのは、温泉信仰の「薬師如来」が現れ、地元住民の篤い支持を受けるようになってからであろう。その背景には温泉の“医療的なよさ”を信じているか又は期待していたことがあったと推論される。

本研究の結論は次のとおりである。既に平安時代、確かに別府（鉄輪）の地域の人々は健康祈願で温泉に期待を寄せていた。「薬師如来像」が大切にされてきたのもその現れであろう。しかし、それは「信心」（場合によっては「迷信」）ないし「信仰」に基づいた“医療”の世界である。それが現在のように、科学的な温泉医療へと変貌を遂げる前段階までに十分に蓄積されてなければ価値の乏しい「経験」の要素は、古代の別府温泉においては認められなかった。すなわち、「信心」に長年の累積の「経験」が加わった時代を経て「科学」へという全体の流れを仮定すると、古代は未成熟の時代としてとらえられよう。

これまで考究した限りの別府（鉄輪）の温泉について、「経験」に基づいた医療利用を今後研究するとすれば、少なくとも13世紀以降になるものと予想される。別府温泉の医療利用の歴史にも、「信心」に始まる「信仰」を経て長年の蓄積である「経験」の要素が加わり、現在のような「科学（化学）」の時代に至る発展段階が認められるか否かについては今後の検討に俟ちたい。但

し、前者から順次後者の時代へと截然と推移したと考えるわけでは勿論ない。時代の推移とともに次第に後の「段階」の割合が多くを占めるようになったと仮定するのである。例えば現代でも、「温泉信仰」は行われているし、科学的根拠は未解明ながら「経験」的によいとされることもある。しかし科学的（化学的）な温泉利用が中心となっていることに異論はない。

SUMMARY

Studies on the classification of ages in the history of pharmacy were carried out. The present author's idea of the 3 developmental stages of pharmacy, "belief", "experience" and "sciences" had to be checked in many examples. Exemplification through the history of pre-clinical utilization of hot spring spas based on "belief" and "experience" during the ancient period in Beppu, Oita Prefecture, Japan has been tried as follows.

Balneological studies on ancient ages in Beppu city were carried out based on old documents. Natural history of hot springs sometimes described there shows that people were so afraid of disasters that they worshiped before them as an angry of the deity. In the meanwhile they expected welfare after their worship of hot springs. For instance, they would play an important role in their fighting against demons. Our studies show that hot springs in Beppu were useful in the maintenance of their desired healthy life.

During the Edo era, spas were utilized for the treatment and prevention of infectious and parasitic diseases in Beppu. What the situation for this purpose before the Edo era was intrigues the present authors so much.

Our historical study does not show that medical and medicinal utilization of the spas, through the inhabitants' experience, might not go as far back as in the Heian era, before which people worshiped the spas in belief.

The hypothesis of the 3 developmental stages of pharmacy above mentioned

cannot be corroborated through the present studies on the ancient history of pre-clinical utilization of hot spring spas in Beppu.

緒 言

人類の歴史の時代区分は意外と難しい。「医療の歴史」や「社会と薬の関係の歴史」に関する教育と研究、現代にいたるまでの各時代の特論研究（教材研究を含む）においては、しばしば政治や王朝の区切りのみが当然のように用いられてきた。このことは人類の歴史における「医」と「薬」を考えると、あまり適切でなく、むしろ便宜的に過ぎないと思われることがある。

時代区分は政治史においてすら、決して容易なことではない。例えば、平安時代から鎌倉時代の境は明瞭であるかにみえる。しかしこれとても、1192年が学校教育においても定着していたかのようであったが、諸説ある。1192年に加えて1183年、1184年、1185年等が挙げられていると日本史の参考書に書かれている¹⁾。況や、薬学史における時代区分はさらに難しく、下記に述べる一例を除いては、筆者らの知る限り、殆ど研究がなされていない。本当に無いのか、今も調査を続けている。

それは日常の教育の場で遭遇することでもある。松山大学薬学部では試験も含め1回90分、計15回の「薬学史」の授業が行われている²⁾。薬の社会における役割とかかわりに関する一通りの講義の完成を目指している。社会的背景、政治変遷などばかりを医薬の展開の背景として考えるあまり、医薬そのものの時代区分ができていない。いわば借用の形で、例えば奈良時代、平安時代には医薬はこのようであったとの記載がこの世に多い。決して医薬中心の時代展開となっていない。この点を是正する努力がなされているが、いまだ認められたとはいえない。薬学に関する歴史の授業および社会人講座の教材に役立つことを目指し、薬と社会の関係に関する歴史を教育する傍らしっかりと研究する必要があるにも拘らず、まだである。

われわれは、薬学部の教育において薬学史を講ずるに、政治史とは別の（も

ちろん政治的背景も極めて重要ではあるが) 発展段階を考究している。「国際薬学史」(山川浩司著)³⁾には次のような4段階の医薬革命が記載されている。

第一は古代の経験と信仰による大きな貢献

第二は錬金術

第三は近代化学の確立

第四は理論的な医薬品の開発

これらとの比較検討も行いつつ、本筆者らの3段階を示す。

第一の信仰と経験を本筆者らは2つに分けてみた。信仰は迷信や祈禱も時として伴い、かなり盲目的な面も否めない原始的時代まで遡ることが可能である。長い年月をかけた試行錯誤、即ちスクリーニングの結果ムリ、ムラ、ムダがある程度は削ぎ落とされているものとして、ここでは定義する「経験」は、原始時代からその蓄積があったわけではない。

第二の錬金術は西洋のようなものは日本にはなかった。錬金術は「化学」に基づくよりは、試行錯誤の経験的な結果として、「化学」の誕生を支えたものである。故に本筆者らの“3段階法”では、これを「経験」に含めてみた。

第三と第四は“3段階法”では「科学」として括り、そのなかで細分化された段階を考える。

“3段階法”はもう少し具体的には、医療の歴史や社会と薬の関係を「民間薬で時として迷信や祈禱を伴うもの」「長年の経験に基づいた価値のある薬」および「化学的、合理的に開発された医薬品」で発展的に捕らえることも可能ではないかと筆者らは考えている。本筆者らによると、薬と社会の関係史は、迷信や祈禱を伴う「信仰」、長い間の試行錯誤という篩を通した結果としての「経験」および合理的な思考と実験を伴う「科学」の3つの段階に分けられるとの作業仮説を既に設定している²⁾。従ってこれからは、これら3つの発展的区切りの当否を数々の具体例を通して検討してゆく計画である。

医薬品の歴史といえば、伝統的な生薬が当然取り上げられよう。これらを3つに大別する。代表的なものは、「植物性生薬」であろう。「動物性生薬」もあるが、「鉱物性生薬」も無視できない。温泉水はふつうの生薬の教科書では取り上げられていないが、それを民間療法の薬とみるとき、ここではとりあえず「鉱物性生薬」に入れて考えてみる。この温泉医療の歴史であれば、「信心」または「信仰」、「経験」、「科学」などが時代区分の候補となる。

温泉は太古の昔より、何となく薬の効果があるものとされてきた。迷信も伴ったものかもしれないが「信仰」の世界で関心がもたれるものであった。人々の日常利用の結果「経験」的に、“医療的”価値が伝承されるようになった温泉もあると思われる。温泉水の化学的分析の出来なかった時代の温泉の価値の認識の発展はこのようなものであったと想像される。しかし検証が必要である。この論文では、別府温泉の利用の歴史と温泉誌をひとつの例として繙くことで、検証の準備を一步進めた。

別府温泉（大分県）は世界一の源泉数と日本一の湧出量を誇り、文字通り日本を代表する温泉である。前者はおよそ2,800ヵ所、後者は1日約13万6,000klといわれる⁴⁾。現代では温泉に「科学的」な健康増進や医療効果が当然のように期待される。これが何時の時代にまで遡ることが出来、それ以前はどのような利用のされ方であったのかは大変興味あるテーマだ。「科学(なかでも化学)」以前の「信仰」や「経験」がどのようなものであったかに関心が及ぶ。日本の温泉は既に江戸時代、健康管理目的で利用されていた⁵⁾。別府温泉も当時、感染症・皮膚病の予防・治療目的で価値があった（投稿準備中）。医療目的の温泉利用はいつの時代に始まったかの視点より古代・中世の別府温泉について文献研究をおこなった。その際「信仰」「経験」の具体的内容に注目した。残されている文献や史料はあまりに乏しいが、とりあえず天災や温泉利用の動物等、信心、伝承も含めた自然誌を考究し一応の結論にたどりついた。しかし、仮説の域を出ない部分も多い。諸賢の意見を傾聴するひとつの契機となれば幸いである。

材料・方法

薬学史・温泉医療の歴史に関する時代区分の研究を目的として、成書の記載やネット情報等¹⁻¹⁹⁾に注目した。今回は文献そのものの考証は実施していない。時代区分の研究に役立つと思われる内容の把握に最大限努めた。近現代の成書⁶⁻⁹⁾を通して検討した古代の別府温泉に関する文献史料は乏しいが、内容を本文中に可及的多く引用した。ネット情報も検討した。

以下の重要な古典『豊後国風土記』（速見郡の条、記述年代不詳）、『伊予国風土記』（逸文、記述年代不詳）、『出雲国風土記』（733）、藤原時平編『三代実録』（901）、藤原継繩編『続日本紀』（797）および『別府市誌』に記載の日名子文書（記述年代不詳）は原典を直接見ていないが、適宜成書の記載やネット情報で、薬学史・温泉医療の時代区分の研究に役立つと思われる関連の内容の把握に努めた。例えば『豊後国風土記』（速見郡の条）からは赤湯の泉とは現在の血の池地獄であること、『三代実録』（901）では鶴見岳噴火のこと、『続日本紀』（797）においては別府市朝見山崩れの記録、そして『別府市誌』に記載されている日名子文書の別府鎌倉時代の温泉奉行など関連の内容を知りえた。

年号の表記はすべて紀元後の西暦（AD）を用いた。2009年9月21日、別府市浜脇に現在も伝わる薬師堂を、同年11月20日、別府市鶴見948の火男火売神社（鶴見権現社）をau（KDDI）のW61Hで写真撮影し、本文中に掲載した。掲載はしていないが、本神社の様子はビデオ撮影し、論文執筆中に参考とした。とりわけ、江戸時代の鳥居と石灯籠は映像でもはっきりと確認された。

結果・考察

古代の別府温泉に関する文献史料は乏しいながらも、近現代の成書⁶⁻⁹⁾をもとに、適宜成書の記載やネット情報で関連の内容を把握した。記録に乏しい古代の別府温泉ではあるが、古文書に関する記述等⁴⁻⁹⁾より、温泉歴史時代区分の研究の目的に適う内容に注目し、当時の温泉利用の様子の再現を試みた。情

報は乏しいが、わずかに見られるのは、大災害などの自然誌の記載、動物伝説、信仰の世界に関するものが中心である。

I. 大災害などの自然誌

別府市誌年表⁸⁾に古代別府の災害の記載で注目すべきものがある。745年、今の大分県（豊前・豊後の国）一帯で起こった地震で度々湧き出るのがあった。場所から察して、このような災害を経て、温泉が湧き出るようになった場所もあったのであろう。『続日本紀』（797）では771年、別府の朝見山が崩れ、住民にかなりの被害が出たことが記されている。今回検討し本筆者らの知る限り、これらが別府における災害の最古の記録かと思われる。記録に残っているだけでも、わずか4半世紀でこのような状況に見舞われるのは、火山性の土地ならでのことで、不安定な土地柄であったといえる。『三代実録』（901）には867年、鶴見岳が噴火し、山頂に黒池、赤池、青池から噴出したと書かれている^{8,9)}。山の二神、火男（ほのお）・火売（ほのめ）の神々の怒りと見なされたらしい。朝廷は鎮撫のため、大般若経を誦経させ、当時の火男火売神社（鶴見権現社）には官位を授けた^{4,8,9)}。自然災害に靈威を認め、恐れて祈ることは当時珍しいことではなかったようである。流行の疫病や感染症などの対策にも、客観的には効果のない手段がとられていたのも不思議でない。「加持祈禱」が幅をきかせていた様子は後述する。なお鶴見岳はその後13世紀に噴火、18世紀末鳴動している活火山である⁸⁾。別府温泉はこの活火山の産物なので、この恐れられてきたこの山のことも記述した。

劇的な山の姿とともに、地表に現れる熱湯のことも記されている。『豊後国風土記』（速見郡の条）には赤湯の泉（現在の「血の池地獄」⁹⁾）が記述されている。当時の大災害のとらえ方では、よくあるように、別府市域の温泉に関しても「地獄」、「神の怒り」などといった認識がなされていた。「地獄」¹⁰⁾とは、悪い人間が死後送り込まれる地表下の世界であり、いわゆる「地獄温泉」はその一部が地表にむき出しになったととらえられていたのであろう。

II. 地表に溢れ出る温泉水で、怪我の治療を行っている野生動物たちの目撃

火山列島日本で大噴火、大地震の後、各所に温泉が湧き流れ出していたことは想像にたたくない。前項に記述のように、住民たちはそれを地底の地獄の現れとして、地表に溢れ出る温泉水に恐れをなしていたことであろう。しかし野生の動物たちは異なる。いろいろな動物たちが傷を癒やしに現れる場所が、実は災害後新たに出現した、里人には未知の温泉であったことも十分考えられる。全国の温泉地でそういう場所は、最初「地獄」が地表に出現したと慄くあまり、すぐには「神の恵み」とはとらえられなかったと思われる。里人は新たな源泉の誕生に興味と関心を伴うだけの気持ちのゆとりがまだなく、恐れと好奇心の混ざった面持ちで眺めたのではないだろうか。しかし怪我を負った鶴や鹿たちが繰り返し温泉にやってきては、傷を癒やしている姿が彼らの目に沁み入ると、心境の変化ないし軟化は自然なことであろう。以上は文献に基づかない本筆者たちの暫定的な speculation である。

大分県とは豊後水道で隔てられた四国は愛媛県松山市の道後温泉は一羽の白鷺が傷を癒やしていたことから発見されたという伝説がある⁸⁾。そのようなきっかけは、大昔の別府の温泉でもあった。別府民間伝承研究会^{8,9)}が1956年に採録の例を挙げる。別府明礬温泉は脚を傷めた鷺が発見した霊湯という。その鷺は10日間ほどやってきたが、その後は脚がよくなったと見え、姿を現さなくなった。“鳥が利用して傷を治した温泉であるから、きっと人間にも効果がある筈だ”とう極めて素朴な「信心」が、温泉の医療利用の契機となっても不思議ではない。別府南立石地区には、脚に怪我を負った鶴が脚を温泉に浸して完治したことから“鳥の湯”と名付けられた話も伝わる⁸⁾。人々が恐れ戦き、熱湯の温泉には畏敬の念を抱きつつも、動物たちが里人に“知らせたこと”により、人の怪我の治療にも役立つかもしれないと期待を寄せるようになった可能性は十分ある。もし近世現代なら、科学的な温泉の分析と記載がなされるころである。しかし古代においては、住民の日常的行為が繰り返されて、その後温泉の一定の評価へと定着していったことであろう。

Ⅲ. 温泉に対する当時の期待—温泉信仰と薬師如来

(1) 温泉信仰—温泉に対する期待

古代日本の疾病の治療といえば、奈良の正倉院などの薬物が想起されるが、平安時代においても、疾病対策でごく普通に“仏の加護を求めて祈る”「加持祈禱」が幅を利かせていたようである¹⁾。マラリア患者の平癒を願って、「加持祈禱」が行われたことは、道長の日記¹¹⁾や『源氏物語（5帖の若紫）』^{12,13)}に出てくる。

疾病対応策を「加持祈禱」に頼る当時の日本において、日常生活のなかで「温泉」にある程度の期待が寄せられるようになったのも些かも不思議でない。そのような期待感は、地元の信仰と結びついて、例えば温泉信仰の神社のようなものが現れてきたと思われる。後述の「薬師如来」に“温泉入浴による健康祈願”が行われるようになったのも、そのような時代背景があったからではないだろうか。

温泉そのものに対してある種の「迷信」を抱いたり、「祈禱」を行ったりした事実は、今回検討した限り確認されなかった。いつ頃からある種の期待と親しみをこめて温泉に接し、身近な信仰の対象となったかも不明である。それはかなりの幅のある期間にわたっていたであろう。一人ひとりの感じ方にも大きな違いがあったとしてもおかしくない。

全国他の地域で記載された温泉に関する古代誌についてもよく調べる必要がある。例えば、『伊予国風土記』は現存しないが、逸文に別府温泉の海峡を隔てた利用についての夢物語が描かれている^{8,9)}。大穴持命（おおなむらちのみこと）が、別府の温泉を樋により伊予国（愛媛県）に引き少彦名命（すくなひこなのみこと）を蘇らせたという伝説である^{8,9)}。実際どのようにしたかよりも、古代すでに医療的価値のあるとされる別府温泉が海を隔てた近隣にも知られていたことに注目したい。次第に別府の里人たちも日常の“医療”中に温泉を採り入れていったのであろう。それが海を越えた地域にも言い伝えに知られるようになったと考えられる。大切なことは、別府に限らず「信仰」段階ながら、

温泉に医療的な効用への期待が寄せられていたことである。更に、関連の古文書について見ておきたい。

『古事記』や『日本書紀』の伝えるところによると、大国主神（おおくにぬしのかみ）と少彦名神（すくなひこなのかみ）は医の先祖とされている¹⁴⁾。この2神は温泉の医療的効用について随所に登場する。温泉に医療的価値があると記している古文書でもう1件注目しておきたいのは、完全な記録として現存する唯一の風土記といわれる『出雲国風土記』（733）である^{8,9)}

(2) 温泉地域における薬師如来の設置

薬師如来は「薬師瑠璃光如来の略で、薬師経に説く東方の浄瑠璃世界の教主、菩薩であったとき12の大願を発して成就し、衆生の病苦を救い、無明の痼疾（持病の意）を癒すという如来」と『広辞苑（第4版，1991）』¹⁵⁾にある。庶民の間で支持されたことも記されている。『別府市誌』⁸⁾で説明の薬師如来は“病苦の人々を救うことを本願とした現世利益（げんぜりやく）の仏”であり、日常生活のなかで温泉の効用と結びついて盛んに信仰されるようになったもの



写真1. 火男火売神社（鶴見権現社）

この写真には写っていないが、別府市立朝日中学校に隣接するこの神社の鳥居や石灯籠（2009年11月20日日本論文著者のひとり牧 純によりビデオ撮影・確認済）は江戸時代に建てられたものである¹⁾



写真2. 別府浜脇薬師堂
 周りが近代化された中において、今日も
 人々に親しまれている⁸⁾

である⁸⁾。別府浜脇の薬師堂（写真）の本尊は平安時代の作と見られている⁸⁾。しかし、それは「信仰」に基づいた“医療”の世界である。

現在のような、科学的な温泉医療の時代であっても薬師堂は信奉されている。温泉地ではない例をひとつ挙げる。高知県香南市の大日寺の本堂から150mの奥院に空海が楠木に爪で彫ったといわれる爪彫薬師がある¹⁶⁾『読売新聞』の記事¹⁷⁾も興味深い。この爪彫薬師堂近くの泉は弘法大師が掘り当てたとされる。その霊水、いわゆる「御加持水」は万病に効くとされ、取水に訪れる人も多い。医療技術の進歩が著しい現代社会でも、薬師に縋るような思いで訪れる人が少なからずいるそうである。

薬師堂ではないが、大阪市中央区道修町の少彦名神社は2008年現在、若者たちの参拝者も絶えないという¹⁸⁾。「信仰の医療」の様態と深度は別として、科学の現代でも見られる世界である。

(3) 温泉の医療利用に関するその後の推移（仮説または speculation）

温泉医療がこれまでのような変貌を遂げるまでには「経験と見聞」の要素が「信仰」に混ざった時代があったと考えられる。確かに、マラリア治療の日本における歴史は「信仰」医療の時代が長く続き「科学（化学）」の時代に直接移行した可能性が高い（論文投稿準備中，第1報）。しかし、これとは異なり、温泉療法は、「信仰」から「科学（化学）」その間に「経験」の時代、あるいはそれらが混ざった時代を経て、進展していったのではないかと想像される。

そして、現在は科学の要素が多くを占めながらも、昔からの「信仰と経験」が生かされているのではないかと考えた。この考えは牧らの所謂「薬学史の3段階仮説」²⁾を基にしたものである。但しそれが温泉の医療的利用の歴史にも適用しうるか否かは今後とも考究すべき課題である。

IV. 考察と結論

以上、天災、伝説、信心、信仰などの点からではあるが、古代の別府温泉の発達誌を垣間見てきた。前述の重要な古典の諸風土記について今回は、現代語訳・解説の『風土記』¹⁹⁾に頼る段階でしかなかったが、今後原典に当たることで更に理解と考察を深めたいと考える。

怪我を負った動物たちが、里人には知られていない温泉にやってきては癒やしているような様子が目撃されたことが、そのような「信心」のきっかけであったのかもしれない。当時の温泉による“医療”は住民の「信心」ないしはせいぜい「信仰」の世界で生きていたものであったが、「祈禱」や「迷信」に関しての実例研究は今回進まなかった。「薬師如来」の信仰は平安時代より民衆の生活のなかで生きてきた。彼らは、神仏（おそらくは混淆）からの授かりものとしての温泉によさを見出していたのであろう。

江戸時代の温泉利用のように、長年の「経験」に基づいた有効な温泉利用の医療が確立されるまではどのような時代であったのか。古代の自然発生的信心ないし薬師如来への崇拝に、新たにその後「経験と見聞」の要素が加わり、併

存していた時代があったのか否かについて現在検討中である。

別府温泉に関する薬学史においても、時代的な重なり合いがあるにせよ、自然発生的な「信心」、薬師如来などの「信仰」、その後の時代に累積したであろう「経験」、そして西洋の合理的な学問が導入された「科学」の緩やかな発展段階が認められるのではないかと予想される。

別府温泉の医療利用は古代においては「信心」や「信仰」のみである。現代はそれらを若干は残しながらも「科学（化学）」のウェイトが最も大きい時代であろう。この順で医療薬学の発展段階を唱えた説、薬学史一般の展開の仮説²⁾のひとつの例として、別府鉄輪の温泉史と温泉誌は注目に値すると判断されよう。

謝 辞 松山大学薬学部医療薬学科の卒業研究で同感染症学研究室に配属となっている4年次の学生たちに、本研究の遂行に当たり、学会発表、セミナー開催も含め、協力を得ている。本筆者一同、謝意を表したい。

関 連 文 献

- 1) 尾藤正英, 門脇禎二: チャート式シリーズ『新日本史』, 数研出版株式会社, 東京・京都・福岡 (1988)
- 2) 牧純, 関谷洋志, 西岡麗奈, 玉井栄治: 松山大学薬学部医療薬学科における薬学史教育事始, 日本薬史学会平成20年会講演要旨集 p.14 (2008)
- 3) 山川浩司: 『国際薬学史』南江堂, 東京 (2000)
- 4) 大分県高等学校教育研究会地理歴史科・公民科部会編: 『大分県の歴史散歩』山川出版, 東京 (2008)
- 5) 松田忠徳: 『江戸の温泉学』新潮選書, 東京 (2007)
- 6) 愛媛県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会編: 『愛媛県の歴史散歩』山川出版, 東京 (2006)
- 7) 豊田寛三, 後藤宗俊, 飯沼賢司, 末廣利人: 『大分県の歴史』山川出版, 東京 (1997)
- 8) 市史編纂事務局企画: 『別府市誌』日新印刷株式会社 (別府市) 編集・制作 (2003)
- 9) 別府市観光協会編著: 『別府温泉史』教育図書出版, いずみ書房, 東京 (1963)
- 10) 井上順孝編: 『現代宗教事典』弘文堂, 東京 (2005)
- 11) 土田直鎮: 『王朝の貴族』(第5巻)『日本の歴史』中央公論社 (1977)

- 12) 吉田幸雄・有菌直樹：『図説人体寄生虫学』（第7版），南山堂，東京（2008）
- 13) 与謝野晶子訳：『源氏物語』上巻，19 版日本文学全集1，河出書房，東京（1968）
- 14) 小川鼎三：『医学の歴史』中公新書，中央公論新社，東京（1964）
- 15) 新村出：『広辞苑』第4版，岩波書店，東京（1991）
- 16) 高知県高等学校教育研究会歴史部会編：『高知県の歴史散歩』山川出版社，東京（2006）
- 17) 読売新聞：札幌周辺見て歩記，爪彫薬師堂（高知県香南市）—今も昔も「おかげ」の力，『読売新聞』（朝刊，2010年1月7日）（2010）
- 18) 別所俊顕：「道修町と神農信仰」日本薬史学会2008（平成20）年会講演要旨集 p.10（2008）
- 19) 吉野裕：『風土記』，平凡社ライブラリー，平凡社，東京（2008）